序章　軍歌と恋歌　1

第一章　新体詩の登場　9
三つの序文　10
東洋学芸雑誌　19
『新体詩抄』　30

第二章　「抜刀隊」――新体詩としての軍歌　51
軍歌「抜刀隊」　52
「ラ・マルセイエーズ」　58
「ラインの守り」　67
田原坂の抜刀隊　70
テニスン「軽騎兵旅団の突撃」　94
「自己犠牲」と「名誉」　102

第三章　志の文学――漢詩の伝統　107
詩言志の文学観　108
慷慨詩の時代　113
還らざる壮士　116

第四章　共感と追随——新体詩の増殖　123
『新体詩歌』　124
湯浅半月「十二の石塚」　129
山田美妙の『新体詞選』　139
国木田独歩「独歩吟」　150
軍歌としての新体詩　157
第五章　古典派の反撃　163
俎上の『新体詩抄』　164
池袋清風の新体詩批判　166
長歌の改良　179
朦朧体論争　186
第六章　西洋派の一撃　193
西洋派の文学観　194
芸術のための芸術　199
森鷗外の美学的芸術論　205
外山・鷗外論争　212

第七章　国民的詩人——民衆歌と叙事詩　233
論争の後　229
軍歌の時代　234
俗謡論　239
叙事詩と叙事唱歌　243
寮歌と民衆詩　252
第八章　近代詩の成立　257
島崎藤村と与謝野晶子　258
感性の革新と詩の自立　266
第九章　忘れられた実験——自由詩と朗読　277
自由律　278
朗読体　283
視点の転換　285
参考文献　293
あとがき　296